

アストンの日本口語文典初版； その書誌

渡 邊 修

英文要旨

1. アストンの生没
2. 学業——当時の言語研究
3. 業績——文法説
4. 「日本口語文典」初版の刊行
5. 初版の書誌
6. 大英博物館蔵本について

The late Prof. Eitaro HIROTA collected all editions (from the first to the fourth) of W.G.Aston's work: A Short Grammar of the Japanese Spoken Language. The copies of its first edition are very rarely stocked and perhaps another copy of it may be found nowhere but in British Museum.

Prof. Hirota's copy of the first edition is a half-bound book, with leather-covered spine and leather corners, shaping the leather to the bands. In addition to coloured end-papers and the title page, the book contains 40 pages of the body (including the preface and the table of contents) and its size is rather small (18.5cm. × 12.3cm.).

The book is made up of ten folds, most of them being consisted of two leaves of printed paper. These leaves are folded back in the inner margin 5mm. wide, so as to give the book moderate thickness. And the book might be supposed to be incomplete one with leaves teared off here and there.

The copy in British Museum seems to have been made in duodecimo in the usual way.

The way of printing in Nagasaki in the early Meiji Period was by using the formes of the original type directly on the press as printing surfaces, without making duplicate plates or the matrices. Since it was easy to move or replace letters, the different image would be produced as the case may be. After the minute comparison of the copy of Prof. Hirota with the one in British Museum, a few displacements were found. They are same in contents but different in typesetting, and so it can be said they are alternative versions. The copy of Prof. Hirota is supposed to have been printed earlier than the one in British Museum.

WATANABE OSAMU: A BIBLIOGRAPHICAL NOTE

on

'A Short Grammar of the Japanese Spoken Language'

by W. G. Aston, M.A., The First Edition.

本学の広田教授は先ごろ急逝されたが、幕末から明治初年にかけての「外人による日本語研究」に関心をよせられ、多くの文典、辞書の類を、熱意をもって集められた。若い時代に亀田次郎の指導を受け、その影響でこの分野の集書にも意を注がれたのである。

亀田次郎は、以前から外人の日本語研究について調べていたが、ちょうど教授の高校生当時にそれをまとめあげようとしていたのであって、後に雨宮尚治編「亀田先生の遺稿、西洋人の日本語研究」（風間書房）の形となってあらわれたものがその内容をうかがわせるものである。この書は、1931年（昭和7年）度大谷大学でなされた亀田次郎の講義のノートによったものである。

大体、西洋人のわが国語の研究について見るに、初めは実用的なものであったが次第にそれが学術的なものとなり、明治初期においてはその面目を一新し、各方面に有数の語学書が出て来て、わが学界へ大進歩を促したのである。維新以後の文法研究について、亀田次郎は次のように「西洋人の日本語研究」で述べている。

先ず第一にこの時代における文典として注意すべきことは英国人の研究である。その最も早く出たものは、Aston の著述である。それは1871年（明治4年）に初版を出した日本国語小文典（Short Grammar of the Japanese spoken Language）である。これは小冊子であるけれども、従来欧州人の著述が粗策であるのに反し、組織的でその特長は分析的排列で全篇を十余篇に分け、説くところ極めて簡明であり、主として説明に重きを置き少しも理論的分子を含まない。（国語学上に於けるアストン氏の功績、亀田次郎；国学院雑誌第18巻第1号、明治45年1月号所載：参照）—中略—

William George Aston は西暦1841年（天保12年）London の Dervy 附近に生れた。彼が学術的教育を受けたのは Queen's College であり、ここに主として言語学を学び、Dr. James Maccosh は氏の師事した Professor の一人であった。而して此の学校に於て古典学で金牌を戴き近世言語学で Bachelor of Arts 及び Master of Arts の学位を受け、次いでまた Queen's University から Dr. of Literature の学位を受けた。氏が日本に來り、国語及び古文学の研究を以てその名声を挙ぐるに至った基礎は實に此の時に築かれたのである。而して Aston は故国に於た時から既に Hoffman の日本文典などによって我が国語の一般に通じていたのである。1864年（元活元年）に通訳生の試験に及第して初めて日本に來た。日本に來てからは、主として堀秀成について古典及び言語の学について修めた。それで Aston 氏の学説が一貫して秀成の説に髣髴たるは實に之に基くものであって後に述べる Chamberlain の学説が橘守部のそれに基づけると好一對である。1870年（明治3年）には江戸公使館の通訳兼翻譯官となり翌年一度帰国して Belfast の R. Smith 氏の娘 Janet と結婚した。その後1875年（明治8年）から1883年まで兵庫の代理公使を兼ねた。翌年 Parks が条級改正の爲、渡鮮するにあたり遂に留まり京城で総領事となった。これより先、Aston 氏が日本在留朝鮮人について朝鮮語を研究し、日鮮兩語の比較研究、その他、有益なる論文を発表したるに依り、また更にその蘊奥を極めたるによって Ernest Satow の推奨に基き渡鮮の隨員に選ばれたものであると言う。而して1886年（明治19年）には歸って東京公使官秘書官となり1889年（明治22年）に養老金を得て退官し、同時に Order of St. Michael and St. George を授けられ、London の East Devon に退隱した。爾來、専ら養老しつつ、我が国に関する研究を継続し、また幾多の著述を公表したが1911年（明治44年）11月27日遂に病没した。歳71。

Aston の経歴については別に広田教授の稿があるので、委細はそれにゆずることとするが、一通りのことを知るために亀田次郎の該書の記すところをそのままにのせたわけである。ところが、これらの記事には誤りが多い。いくつかの点について調べて得たところを追記して訂正を加えるこ

とする。

1. アストンの生没

アストンの生没について「西洋人名辞典」（岩波書店）には、「アストン Aston, W.G. 1841, 4, 9—1911, 11, 22 アイルランドの生れ」とし、「日本文学大辞典」（新潮社）には「1841年（天保12年）4月9日愛耳蘭土ロンドンデリーの附近に生れ1911年（明治44年）11月22日、サウス・デヴォン州ビーヤに没, 71.」とある。ロンドンデリーは北アイルランドの北西部にある都市（54.60N, 6.80W）でもとの名はデリーであったが、17世紀のなかごろにロンドン市の植民地となって、ロンドンデリーといわれるようになったものである。アストンは1841年4月9日このロンドンデリーの近くで生まれた。その父はジョージ・ロバート、アイルランドのユニテリアン教会の牧師であった。そして、1911年11月22日、イングランドのデヴォン州西南部のビーア（50.42N, 3.09W）に没した。彼は1889年に年金をえて官途を退いてからは、ビーアの山の手に住んだのであるが、その地で没したのである。

亀田次郎の講義筆記に、アストンをロンドン生れとし、その没した時を1911年11月27日と誤ったのは、明治44年11月30日の読売新聞や国民新聞が、次のように報道しているので、それにもとづいたものと思われる。

○ 逝ける文壇の二名士〔読売新聞 明治44年11月30日第12413号〕

▲アストン氏 世界に日本画として名声の高かったウキリヤム、ジョージ、アストン氏は去廿七日溘焉として逝けりとの報は突如として達せられた。氏は1841年倫敦デリー附近に生れ、クキンスカレッジに学びて俊秀の誉あり、文学博士の学位を授けられた。1864年通訳生として来朝し、英国公使館の通訳兼翻訳官として勤務し、更に副書記官に進み、1880年より3年間、兵庫の代理領事となり翌年朝鮮総領事となり、次で書記官となり、1889年職を辞して帰った。著述にはかの噴々の評ある「日本文学史」を始め「日本口語文典」「日本語文典」「日本紀の翻譯」等あり、享年71

▲イエンゼン（以下略）

○ アストン氏逝く 日本文学史の著者〔国民新聞 11月30日〕

廿八日日本文学の批評にて有名なるウキリヤム・ジョージ・アストン氏が廿七日逝くと倫敦電報あり氏は1841年倫敦デリー附近に生れて1871年スミス・ペルフアスト氏の令嬢ジャーネットと結婚し皇后大学に学びて古文学に金牌賞を得、現代語学にて賞表され文学博士の学位を授けらる1864年に日本に通訳生として渡来し東京なる英国公使館の通訳兼翻訳官たり同75年より82年まで副書記官たり1880年より83年まで兵庫の代理領事たり84年に朝鮮の総領事となり86年には東京にて日本語書記官となり1889年養老年金を得て退けり享年71才著述としては「日本口語文典」数版を重ね又た「日本語文典」あり他に「日本紀」翻譯其他の論文多き中に「日本文学史」は外人が著はせる日本文学史中の最も精細にして創見ある者として学界に重ぜられ我邦已に翻譯ありて世に行はる。

「日本文学大辞典」の記事は、笈五百里の執筆であるが“Dictionary of Biography” (Oxford) によったものである。この人名辞典は The Times, 23 Nov. 1911, 2 Feb. 1912; Foreign Office List; Who's Who, 1911などを典拠としている。ほかに、H. Cordier は“Toung Pao”の1911年12月号にアストンの死亡通知をのせて、「1841年 Londonderry の近くに生れ、22 Nov. 1911にイースト・デボン州ビーアの山の手に没す」と記している。

アストンの生没は、これによって、「日本文学大辞典」以下に記すように、1841年4月9日ロンドンデリーの近くで生れた。

1911年11月22日デボン州ビーアの山の手で没した。

とするのが正しい。

2. 学業——当時の言語研究

アストンは、はじめ教職にあった父について学んだが、1859年（安政6年）にロンドンデリーから東南東に120kmほどはなれたところにあるベルファストに出て、Queen's College に入学を許された。この大学は1845年に設立されたのであるが、University の資格を得たのは1908年（明治41年）である。彼はここで俊秀の誉も高く学業を卒え、1862年（文久2年）にB.A.の学位を、1863年（同3年）にはM.A.の学位を授けられた。彼はここで、主として言語研究のための学問的知識を修め、卒業に際しては、古典語について金メダルを受領し、近代諸国の語学と文学について褒賞を与えられたのである。

一体当時の言語研究、言語の学問はどのようなものであったであろうか。ここでその概要を、主として「言語篇」（文部省訳百科全書の内、大槻文彦訳）に拠って記してみる。この百科全書は、原名をインフォメーション・フォル・ゼ・ピープル（英人ウイルヘルム・チャンブル ロベルト・チャンブル共著）といい、1833年（天保4年）に初版、1875年（明治8年）に5版を出したものの訳である。その中に「言語考究ノ目的」は「自国ノ言語、他国ノ活語或ハ死語」について、之を「正当ニ理解セシメ各個ノ言語ヲ富麗ニ使用セシムル路ヲ開クヲ以テ其本旨トセリ」とある。言語は思想感情の表現であり、「能ク之ヲ解シ又能ク之ヲ談ジ之ヲ書ク」ためには、実用的な「平常ニ適切ナル」規則としての文典の制定、辞書の撰述が必須なのである。

しかしながら、「言語ヲ学ブ目的ハ右ノ一途ニ止マラズ。即チ二種或ハ三種ノ国語ヲ学ビテ彼此互ニ相比較シ其符合スル所ノ者ト其異ナル所ノ者トヲ記ス」一途がある。「斯ク比較考究スル時ハ其中ニ博ク数国語中ニ普通スル者」つまり言語の一般的法則を発見する。「普通文法（ユニブルサル・グラマ）」と名づけるものが是である。言語は人間が自分の考えを表わすために発明した記号であるから、言語を通して思考の本質とその一般的法則を推考することができるはずである。

「此ノ如ク比較考究シテ得タル結果ハ尚之ニ止マラズ」此他に諸国語相互間の比較によって、語彙・音韻の「符合スル所アルヲ発見」し、活用組織の面における「類似ヲ見出」し、「人類言語ノ種類ヲ類彙シ、各族群ニ分チ、又其類似ノ遠近ノ度ニ随ヒテ之ヲ各派ニ小分」し、諸国語を「逐一類別スルヲ得」、その結果諸国語の空間的な序列を見出し、それらの近縁関係が樹枝状系統図によって明示されるのである。この考究に際して「種々ノ国語ノ互ニ相親属」し「各国言語ノ連絡スル所以」を「探究セン」と「焦心苦慮」して「其語ノ由リテ出ヅル所ノ本源尽ク皆同一」なりとし、個々の言語の背後にかつての統一言語を想定するのである。そして、諸国語が起源を一にし、一種の言語から発生・分化したものであるとすれば、諸国語相互間の類似・対応（符合）は、当然語源的根拠をもつこととなるから、比較による類似と対応の発見は、諸語の根源をさぐり原始形を探索することを可能にし、また「同国ノ言語」を「其通用セン年代ニ溯リテ彼ノ時代ト此ノ時代トノ沿革ヲ比較」する沿革考究法とこの比較考究法とを「連合スルヲ由リテ」言語の生成発展を究明する道を開くこととなるのである。19世紀の言語研究は、此両法の連合によって、「最モ光明ヲ与」えられたのであるが、とくに言語の比較考究法は、歴史的溯源と祖語の再構を可能にし、過去の言語事実を再建するための手段となり、比較によって得たすべての成果を史的展望のうちに収めるときは、国語の生成の由来や系統的関係を知り、歴史的発達を明らかにすることとなるのである。

大体、言語の根本は民族の生活・営為のあとであり、諸民族の精神の外的顕現である。諸言語には諸民族の生活と思想・文化が反映している。したがって、どの国語にも「各個国語」の固有性があり、それぞれ独自の世界観がある。言語を諸民族の精神生活との関連において考察するときは、

諸言語の系統にてらして“各人種ノ互ニ相親属スル所以ヲ推考”し、思想の根源をさぐり、精神史の根底に光を与えることができ、祖語の再構とその根本語（基礎語）の吟味によってその国の或る民族の原故郷および文明を探究することができるのである。

アストンの日本研究が、日本民族の思想・信仰の根源をさぐって、言語、文学、歴史、宗教、法制にまで及び、日韓両国語同系論を創唱し、日本書紀を翻訳して日本上代文化を欧州に紹介し、「日本文学史」と「神道」を著わし、それらが正確、精細にして創見あるものとして世に重んぜられ、研究者に多大の参考となったなど、極めて多方面であったことの素地は、かかる系統的歴史的なあとづけとその根拠をさぐる19世紀の言語研究の背景のもとに培われたものなのであろう。

さて、言語の変遷転訛は“偶然ニ起ル者ニアラズ。其全体ニ就キテ之ヲ観レバ履踐スル所ノ定則”あるを発明する。“言語ノ変化発達スル所以ハ専ラ此定則ニ拠ル”にしても、なお、言語学を言語史に還元し、確実な資料を網羅して組織的な比較を試み、言語の歴史のなかから「例外なき法則」を探究することによって、それを科学的、実証的、分析的な法則科学とし、言語学の真の独立をめざした新しい文法家の集団が活躍したのは1870年（明治3年）以後であり、人間精神および社会との関連によって言語の変化する所以の道理を説くパウルの「言語史原理」が現われたのは1880年（明治13年）であった。これらはアストンが学業を終えてからはるかに後である。

3. 業績——文法説

くりかえすまでもないが、アストンは1864年（元治元年）に来日して英国公使館員となり、日本語朝鮮語に習熟して幕末明治期の対日・対韓交渉に当り、大いに功績があった。傍ら日本の言語・文化の研究を進め、日本学者としての名声を馳せた。1889年辞任して帰国し、デボンに隠退した後も日本研究に没頭した。

アストンの来日当時は、日本語のまとまった辞書も文典もなく、外人の日本語学習は極めて困難であった。もっとも Alcock や Brown の会話書は俗語を主としたもので1863年（文久3年）に、Hepburn の和英語林集成はやがて1867年（慶応4年）に出て、世を利すること最もひろかったとはいえ、なお、規範的な規則の書である文典のみるべきものは現われなかった。外人に対してばかりでなく日本人自身にとっても事情はかわらない。やはり実用的な規則の定立はなく、一部の文典としてその説く所の具備せるものはなかった。大槻文彦は明治初期の日本文法の定めがたき事をくわしくのべて、当時“日本文法ヲ制定セントスルハ実ニ紛乱ノ糸ヲ治ムルガ如”き極めて難事であったといっている。日本人がひとまずまとまった洋式文典の形をととのえたのは、文部省にゆかりのある田中義廉の作を第一とするが、“ひたぶるに洋文典に拠りて杜撰なり”と評せられた。これはアストンの来日後10年を聞いたときのことである。

大体“日本文法ノ全備セル者”がなければ“我国文学ノ基礎立”たず、文語を知らなければ書籍・新聞・広告・葉書・掲示などは何も了解されない。もちろんそれまでに文語についての研究書がなかったわけではない。“我国古言ノ文典ニ就テハ既ニ先輩ノ著作セル数種ノ書アリ。”しかし、“先輩皆唯名詞動詞形容詞及ビテニヲハ等ヲ論ズルノミ他ノ代名詞副詞接統詞感詞等ハ或ハテニヲハニ混ジ或ハ更ニ品別セン所ナシ。”“且其文法古言高尚ノ体ニシテ直ニ之ヲ今日日用ニ供セントスル時ハ大ニ不通ナルヲ免レズ。”このごろ、“日本文典ト標スル著書亦既ニ数種アリテ其論皆亦善シ。”しかしなお、“書中ノ每処語格ヲ示スニ当リ種々ノ語例ヲ引用シ来ルニ古今雅俗ヲ混ジ”“猶零碎ノ布片ヲ縫綴セル襤褸ノ如ク紬帛麻綿相錯リテ章ヲ成ス若シ此種ノ法ニ依リテ文ヲ成サシメバ我之ヲ襤褸体ノ文ト目セザルコトヲ得ズ。”現代の文語文典を制定しようとする時は、“先ヅ我国ニ行ハル所ノ数種ノ文体ニ就キ其類属ヲ分チ以テ漸クニ其端緒ヲ求メザル可ラス。”こんなわけで、日本の文章の格法を一定せんとする日本人の本格的な研究は明治14、5年からみられたのである。

又、時勢通用の“今言ノ文典ニ就テハ世ニ未ダ其撰アラズ而シテ議者ノ立論モ亦各異同アリ”
“其文法ヲ論ズル者ハ或ハ古今ヲ折衷セント云ヒ或ハ直ニ普通ノ俗語ニ文法ヲ附シテ用キント云
ヒ” “其他諸説ノ異同モ亦多シ” “今言文典創製ノ業ニ至テハ其文法ノ或ハ古今ヲ折衷スルト或ハ
普通ノ言語ヲ以テスルト其一定適當ノ説ヲ得ルヲ實ニ是レ一大難案”である。何となれば、“國中
ノ言語一ニ帰スルコトナク会話ノ訛言全国到ル処ニ相違ナル、且貴賤階級ニヨリテ其ノ用語不同”
“男女間ニモ其用語同ジカラザルモノ多” “能ク幾多ノ学士ヲ集メ幾多ノ歳月ヲ期スルニアラズン
バ其成功ヲ見ルヲ能ハザルベシ。”日本の口語文典研究に着手したのは35ないし40年、重要な出版
物として最初に出たのが、吉岡郷甫「日本口語法」1906年（明治39年）である。

こんなときにアストンは来日してから後わずか数年で日本語法に通じ、よくその特徴をとらえて、
外人のための「日本口語文典」の著述をし、日本の水準をはるかにこえて、日常普通語の文法を制
定創始したのである。その基準としたところは“俗語”でなく、都のことばであり、「心学道話」
「鳩翁道話」などをその好模範であるとしている。なお、仏訳の序では江戸語の入門書として「交
易問答」が有用であるといっていることを付記しておく。「日本口語文典」はきわめて出色のもの
で、そのころ来朝した外人にいたくもてはやされた。1888年(明治21年)の第4版には特に東京語に
ついて配慮がなされたが、それは近く東京方言が上流社会一般の用語となることが見込まれるから
であって、それまでの東京語は、なお時勢通用の普通語たる地位を得ていないものとみなされてい
たのである。もっとも、1888年末にチャンブレンは「日本俗語文典」“A Handbook of Colloquial
Japanese”を著し、“俗語”としての東京語を基としたが、それがかえって新都の日本人と日常会
話をする者に利すること多く、アストンの「日本口語文典」は外人向入門書としての地位をこれに
ゆずることとなった。

文語についてもアストンは、幾多の困難を克服して邦人の文法書を読み、其長所をとり、1872年
(明治5年)に「日本語文典」“Grammar of the Japanese Written Language”の著述をした。そ
の中に活用の起源について説いたところは当時あって卓見である。彼が“吾邦古人の格法を立て
られしを基本として”日本風の文章の格法を定めたことは注目してよいと、上田万年、新村出らは
たたえている。アストンの文法についての所説は、里見義の「雅俗文法」1877年(明治10年)の内
にみえる。里見義のわが国語は西洋諸邦の国語と大いに趣を異にするが、言詞の道は其邦其境の真
の格法を了解せねばならぬものなのだから「吾邦は吾邦の法則に依り易々と論らしめんより外に好
手段はなきが如し」故に吾邦古人の格法を立てられしを基本とするという主張に評して、

- 英人アストン氏曰、語格の論吾も同意なり元来日本語は一種特別の物にして西洋諸邦の文法
とは大いに性質を殊にしたり然るに近来西洋風に綴りし文典あれども甚不都合なれば吾は見る
事を好まざるなり且又往々語格を誤りし処も少からず其性質を殊にするの詞を以て強て洋風に
模擬したるの致す処なり然らば当時平常語迄も語格を立てんには如何して初心の者を論さんか
といふに則詞の八衢及び詞の玉緒等の物を根元として時世に適用の文法を製し真の日本風を教
ふる外良法ある事なし故に吾著はせし書にも西洋人のために此論を主張して日本語格を教へた
りき

後年、チャンブレンは近代文語に関する文典としてアストンの著述の取扱う範囲が広きに過ぎて
いることを非難し、1886年(明治19年)“A simplified Grammar of the Japanese Language
modern written style”を、翌1887年(明治20年)「日本小文典」を著している。なるほどチャン
ブレンの「日本俗語文典」はこれまで出来ているものの中では最も完全に近いものであったが、こ
の「日本小文典」はアストンの「日本語文典」に劣っていて、結局、アストンの「文語文典」はチ
ャンブレンの「俗語文典」と並んで外人の日本語研究上における双璧と称せられるものである。

アストンは日本に関する学殖深く、外交官として活躍し、進んで日本人の生活・思想を研究し、その歴史と根源をさぐって日本人の内面生活に光を与えた。彼は外人としては学習の困難な古いかなと漢字とに習熟し、多方面の和書古典籍をひもとき、1896年(明治29年)に日本紀を翻訳し、1899年(明治32年)に日本文学史を編み、1905年(明治38年)に神道を最初に宗教学的に研究したのである。9500冊におよぶこれらの古典籍は彼の死後にケンブリッジ大学におさめられた。

彼は、創意に富み、広く世界に類例を求めて比較研究し、科学的批判的で、アーネスト・サトー、チャンブレンと並んで、日本の語学文化上の偉大な功績者である。イギリスは彼の官途を退いたときその名誉をたたえて、文官勲章 O.M.G. を、Queen's University は Honor. Dr. Lit. を授けた。

サトーは英国外交官として大きな功績があった。日本の文学語学を始め、民俗、歴史、書誌等多方面にわたる研究を発表している。チャンブレンは、博言学教師として、目を日本の語学文学歴史風俗に向け、主として日本の古典の語学的歴史的研究に業績をあげ、多くの俊秀を育て、国語・国文学界にその影響は極めて大であった。

4. 「日本口語文典」初版の刊行

さて広田教授はアストンの「日本口語文典」の初版と第2版、第3版、第4版を全部揃えて集めている。その初版は1869年、Nagasaki、第2版は1871年、Belfast、第3版は1873年、London、第4版は1888年、Tokio で出版されている。これは亀田次郎のいうところと同じくない。亀田次郎は、この初版が1871年に Belfast で出版されたとしている。Wenckstern の「大日本書史」にはアストンの「日本口語文典」の第4版をあげ、その説明に、初版から第3版までは1871年から1873年までの間に Belfast で出版されたと記している。「日本文学大辞典」も初版の刊行を1871年としている。なお、Wenckstern はつづいて、これが E. Kraetzer によって仏訳せられ、1873年(明治6年)に出版されたことを記している。亀田次郎が、「この書は第一版を出した翌々年、即ち明治6年に仏蘭西人 E. Kraetzer によって仏訳せられて“Grammaire abrégée de la langue parlée Japonaise avec un vocabulaire”と題して出版せられた」と記しているのは、全くこれに拠ったのである。福井久蔵の「日本文学史」の年表など、Wenckstern に拠るものはもちろんこれと同じである。しかし、H. Cordier の「日本書誌」には初版をあげて、広田本のとびらのタイトルのままと記載している。そして仏訳本については、第2版をもとにフランスの横浜領事館書記官 Kraetzer によって仏訳せられたが、それは原著者による正誤を加え、用語集を付載したものであることを記している。松村明は「洋学資料と近代日本語の研究」などに、アストンの「日本口語文典」の初版は1869年に長崎で刊行され、その後数版を重ねて、再版は1871年にイギリスのベルファストで刊行され、3版は1873年にロンドンで刊行されていると記している。そして、先ごろ British Museum をたずねて、アストンの「日本口語文典」が早くから知られているのに、わが国では初版本の所在を聞いたことがないので、おそらく大英博物館には存在しているだろうと思って、それを探って、従来わが国でいわれている1871年ベルファスト刊と違った1869年長崎刊の初版本を見ることを得て、やはりそれが従来わが国でいわれていたのと違っていたことを発見して大収穫であったと喜んでいるが、実はそれが身近かに、すでに広田教授の古くから所蔵していたものの内にあって、結局その初版が1869年長崎の刊行であることが確かなことであったのである。その上、1871年に Belfast で出版した第2版の序には、「この版では書き加えたり書きなおしたりしたところが多い」ということばがあるところからも、初版のところどころを増補したりかき改めてその版のつくられたことが考えられ、初版と第2版とは異なるところのあることはわかるはずである。してみると、亀田次郎も福井久蔵も、Wenckstern の記載をたよりに記しているだけで、初版はもちろん第2版もみていなかったの

ではなかろうかと思う。因みに、亀田蔵書は第4版だけであったようである。1888年（明治21年）東京において出版された第4版は、名を“A Grammar of the Japanese Spoken Language”と改め、内容も著しく改訂、増加されている。

以上を要約すると、アストンの「日本口語文典」は、初版が1869年に長崎で刊行され、第2版はそれを若干増補訂正して1871年に Belfast で刊行された。この年にアストンは賜暇帰国して、ベルファストの R. Smith の娘 Janet と結婚している。この際に Belfast で刊行したものであろうが、この本は誤も多かったので、仏訳本でそれを正誤し、ひきつづきその章節を整頓して1873年にロンドンで第3版を刊行したのである。すでに仏訳本で Yedo 語の入門書として「交易問答」をあげ、1888年に東京で刊行された第4版は、特に東京語について配慮して大いに内容を増補改訂し、その書名から“short”を削り、彼の別著「日本文語文典」“A Grammar of the Japanese Written Language”に対して「日本口語文典」“A Grammar of the Japanese Spoken Language”と改称したのである。

5. 初版の書誌

広田教授蔵「日本口語文典」第1版の内容的研究は後日に俟つこととして、ここには若干の書誌的なことを記してみる。

本書の大きさは185×123mmの洋紙、洋綴の小本である。表紙は半皮装丁本、その背は皮、バンドのところに皮にかどを立てて格好づけている。平にはかど皮のほかかざりはない。みかえしは、藍色の紙を用いてあったものと思われるが、それをひきはがしてしまって今はない。とびらのタイトルは書名の部分だけ意匠活字を用いている。その裏は白いまま。序文1ページ、その裏は白いまま。目次1ページ、その裏はやはり白いまま。あとは本文であるが、本文の第2頁のところを“5”とページづけし、以下40ページの最終ページまで完全にととのっている。それにつづいて白紙が最後の一枚。裏表紙の前の遊び紙は色紙であるが破損している。この本は総体的には原装のままであると思う。

とびらの意匠活字をのぞいて、本文の印刷は、日本語をイタリックで示すほか、概ね一様の活字を用いている。一二の例外を除いて、1ページは37行組みで、表の部分は幾分活字を小さくしているので、19ページ、20ページのように、表のあるところは、それぞれ38行組み、42行組みとなっている。

その製本は幾分特異なものと思われるので詳細に記しておきたい。大体4ページを1折として、10折を糸で綴じているのであるが、最初の折は、序と目次のひきつづいた一枚を2つ折りにし、それにとびらののどの部分を5mmほどおりまげて糊づけしている。つぎは5・6ページと7・8ページの4ページ分を2つ折りにし、第3の折は9・10ページと11・12ページの2枚の印刷された紙の内側の余白を幅5mmほど折りまげて1折としている。同じような折は、13・14ページと15・16ページ（第4折）、17・18ページと19・20ページ（第5折）、21・22ページと23・24ページ（第6折）、25・26ページと27・28ページ（第7折）、29・30ページと31・32ページ（第8折）である。第9折は33・34ページと35・36ページとのひとつづき4ページ分を2つ折りにしている。第10折は37・38ページと39・40ページとの2枚の紙の内側の余白のところを折りまげて1折としたところに両面白最後の一枚ののどの部分を第10折に重ねて糸綴じしている。したがって、目次の裏の白いところに5mmほどのものを糊づけしたあとが見えるほかに、8ページと9ページ、12ページと13ページ、16ページと17ページ、20ページと21ページ、24ページと25ページ、28ページと29ページとの間には、5mmほどを残して切りとったあのようなものが2枚ずつみえる。36ページと37ページとの間にはそれが3枚にもなっているのである。これは一見、この本が不完全なものなのではないかと疑わせ

るものである。しかしこのような切りとったかのようなところが1か所にとどまらないし、内容に不足しているところはないから、このやり方は故意のしわざとしか思われぬ。或は改装に際して折丁の背が破れてきたので、余白の部分を改めて折りまげたのではないかと考えられようが、いまの内側の余白がとくに少ないというわけでもないし、むしろかかる製本に応じるためにとくに余白をひろく印刷したものと思わざるをえないようでもある。つまり、40ページそこそこの薄手のものをなるべく厚くみせようとしたとか、この本のような皮装の上製本をつくるためにはある程度の本の厚みをもたせる必要があるとかいうので、このような手間をかけたのだと思うのであるが、多分後者であろうと考える。

もっとも、このような製本上の理由でなくて、何か印刷上の理由があったのかも知れない。

今日日本で行われている活版印刷は、1870年（明治3年）に長崎の本木昌造が外国の技術を模倣してくふうしたものに始まっているということである。本木昌造は、1862年（文久2年）に流しこみ活字を始めて鋳造し、1869年（明治2年）に長崎製鉄所付属活版伝習所を設立し活字製造を試みた。その後東京や大阪で活字を製造して売出し、明治6年ともなると活字を使った印刷術も普及し、各地で新聞を創刊して、活字文化が地方へも広まった。これらはすべて本木昌造の苦心に起源するものである。

外国では19世紀に印刷の方式と種類が多様化し、新聞などの量産を必要とするようになって、印刷機と印刷技術がめざましい発達をとげていた。そこで新文化として明治初期には西洋流の活字と印刷術の移入が盛であったわけである。まず1848年（嘉永2年）シーボルトが活版印刷機を将来した。1855年（安政2年）長崎のオランダ商館内に印刷工場として活字判摺立所がおかれた。1863年（文久3年）新文化の最高機関たる開成所に活字科も置かれた。1868年（明治元年）巴里博覧会に参加した徳川昭武一行が活字印刷機を持ち帰った、などのことが注目される。そして、活版印刷もひろく利用され、一連の出版物が長崎はじめ各地で印刷刊行された。1851、2年（嘉永4、5年）ごろ洋式活字を用いて「和蘭陀通弁書」刊行、1860年（万延元年）大鳥圭介が「築城典型」を洋式活字で印刷、1862年（文久2年）「英和对訳袖珍辞書」を洋書調所から出版、その英文は洋製活字、そのほか。

しかし実際に英字印刷はもっと早くから、かなりのものが出版されていたものと思われ、ついに1871年（明治4年）には“Nagasaki Shipping List”が創刊されるまでに到っている。もっとも、精美、長大なものとなると、活字のもちあわせがないとか、精巧な特殊なくふうがいるとかで、これをわが国で印刷することは困難であった。そこで1867年（慶応4年）ヘボンが「和英語林集成」を日本で印刷するつもりであったが、活字不足でやむをえず、上海で印刷することとなった。タイトルにはなお Yokohama のままである。

こういった時期にアストンは Walsh の手によって長崎でこの書を印刷出版したのである。もっとも、印刷発行は長崎と記されているが、洋式の製本技術は1873年（明治6年）に製本師パターソンによって伝えられたというのであるから、こんな特殊な印刷装丁は日本ではできなくて、上海あたりに出したのではないかと考えられようが、必ずしもそうではなさそうである。その印刷は、名刺、はがき、ちらしなどのような部数の少ないものを印刷する原版刷りで、活字を組んだ活版そのものから直接印刷している。これは活字のぬき差し、入れかえも、組み方を変えることも自在にでき、修正が容易な反面、何かの事情で活字が脱落したり組版がくずれたりするおそれがしばしばある。本書の26ページの“p”が欄外に、そのつづきの“refix”とはなれて印刷されているのは、そのせいで、組がゆるんで“p”の活字がとび出したのであろう。又、印刷機が小さくて、1台の印刷機に1ページずつまとめた組版をたくさん収容して配列できないとか、用紙の大きさに制限が

あって一度にたくさん印刷できないとかいうことで、せいぜい2ページをひとまとめに印刷できるだけといったことが、結局このような特殊な製本を試みるきっかけにもなったのだと思われるからである。

6. 大英博物館蔵本について

ちかごろ、広田教授の蔵本と British Museum の蔵本と初版の2本を比較してみた。

British Museum の本は、やはり12mo. 四六判位の小さい本である。表紙は黒無地でボール紙にクロスをはったもののようで、表面中央に金色の王冠(25mm四方位)が描いてある。見返しは厚目の白紙、次に題を書いたとびら、この題字のうち“Japanese Spoken Language”の部分だけ飾り文字、その裏は白。次は序文1ページ、その裏は白。次は目次1ページ、裏は白。あと本文。それから裏表紙の前に1枚厚目の白紙。裏表紙はちぎれている。12ページを1折とした普通の製本のようである。

両本の内容はもちろん同じである。しかし、(A) 序文についていえば、第7行目が広田本は“to be”で終わっているのに British Museum 本は“to”で終わっている。第8行目が広田本では“used with caution”となっているのに British Museum 本は“be used with caution”となっている。(B) 26ページの第18行目について、広田本では“p”が欄外に“refix”とはなれて印刷され、“r”の前に1字分のあきになったところがあるのに、British Museum 本は欄外になにもなく、“refix”の前は1字分のあきになったままである。(A)は活字の入れかえによって組み方を変えている。“be”が上の行にある広田本も“be”が下の行にある British Museum 本もともにそれぞれの行の字間はよく調節されている。してみると、“be”をちょっとつぎの行へうつしたというだけでなくその活版の原版そのものをもう1回組みなおしたものと考えないわけにはいかないであろう。あるいはその組版が印刷作業中に何かの事情でくずれたりしたのではなからうか。(B)も、広田本はこのページの組版がゆるんで“p”がとびでたのをそのまま印刷し、British Museum 本はそれが脱落したか、それをとり除くかして欠けたのに、そのまま印刷してしまったものと思われる。事実 British Museum 本はそれほどでもないが、広田本の26ページの組版はたしかにゆるんでいるようで、行の活字のならびが波をうっている。さがせば正しい本文“prefix”とした本があるのかも知れない。もしあったら、だんだん組版がゆるんでくずれて行った過程をはっきり見ることができて、これもおもしろいだろう。とにかく2本は同じ内容をもっているとはいえ、明らかに異活字版である。もっとも、全部が異版というわけではない。10ページ第19行、“nanⁱ da”は両本とも“i”が上付きになっている。10ページ第22行“brought”は両本ともに“r”字の下が欠けた不良の文字である。15ページ下から12行目“only”は両本とも右上にピリオドがある。31ページ第12行“expressed”の前の“s”は両本ともに転倒している。など、このほかにも両本には偶然の一致とは考えられない数多くの一致がある。全体としては両本が同版であるということができよう。

結局、この種の出版物の2本は必ずしも同じではない。時に1冊1冊自然に異なった印刷物となることがある。また故意に変更を加えて、たとえ内容は同じでも組版を異にすることもある。それにしても、この事実によって、名刺は2枚と同じものはないと世にいわれることを思い知らされることとなった。しかし今まで寡聞にして、諸書についてこのようなことがあったということをあまり聞かないが、当時の印刷技術としては当然おこりうることであり、事実としてもこうしたことは数多くあることだろうから、この時代の本を多く見ているものはそれを普通のこととして、特になぜねることもなかったのであるかも知れない。しかし、今後このようなことにもやはり関心をもってしらべておきたいものである。

A

SHORT GRAMMAR

OF THE

Japanese Spoken Language.

BY

W. G. ASTON, M.A.

INTERPRETER, H.B.M. CONSULAR SERVICE, JAPAN.

NAGASAKI:

PRINTED AND PUBLISHED BY F. WALSH.

1869.

アストン：日本口語文典初版 扉（広田教授蔵）

アストン

日 本 口 語 文 典 初版

序 文

P R E F A C E .

THIS book is intended for the use of merchants and others who wish to acquire a Colloquial knowledge of the Japanese language.

The student should also provide himself with Dr. HEPBURN'S *Japanese Dictionary*, and some of the numerous Phrase-books which have been published will be found useful, but they all require to be used with caution.

Few Japanese books are written in the Colloquial idiom, the grammar of which is very different to that of the written language. The *Shingaku Dōwa*, and the *Kiō Dōwa*, popular discourses on morals in the spoken dialect of the central provinces of Japan, may be recommended to the student.

(広田教授蔵)

P R E F A C E .

THIS book is intended for the use of merchants and others who wish to acquire a Colloquial knowledge of the Japanese language.

The student should also provide himself with Dr. HEPBURN'S *Japanese Dictionary*, and some of the numerous Phrase-books which have been published will be found useful, but they all require to be used with caution.

Few Japanese books are written in the Colloquial idiom, the grammar of which is very different to that of the written language. The *Shingaku Dōwa*, and the *Kiō Dōwa*, popular discourses on morals in the spoken dialect of the central provinces of Japan, may be recommended to the student.

(大英博物館蔵)

cannot say *Watakushi o kayeri nasarinasya* for 'I will go away.' It is chiefly used in the second person, and is very common in the Imperative Mood. Ex. *O kayeri nasare*, please go away; *o ide nasore*, come! *sukoshi o machi nasare*, wait a little; *mō o kayeri nasarinasa ka*, are you going away already? *o haiti nasarinase*, be so good as to walk in.

Nasaru is also used in the third person in speaking of persons of rank or to whom respect is due. Ex. *Dannauchi ni o ide nasaru ka*, is the master at home? *kōshi ga o kime nasarinashata tōri*, in the manner decided by the ministers.

As shown in several of the above examples, *nasaru* may be combined with the honorific auxiliary *nasu* in the same way as any other verb.

Nasuru is much used as a more polite word than *suru* with nouns of Chinese origin, which in this case generally prefix the honorific particle *go*. Ex. *Go men nasore*, do honorable permission, i.e., I beg your pardon: *go ran nasore*, look! *go keiko nasarinasa ka*, are you studying? *itsū go shuppan nasarinasa ka*, when do you sail?

§51. *Koto*, action, thing, may be called an auxiliary noun. It is much used with the present participle, the negative form in *nu*, and the past tense in a way which will be best understood from a few examples. *Iku koto*, the going; *ikanu koto*, the not going; *itta koto*, the having gone; *iku koto wa dekinashō ka*, will the going be possible? i.e., shall we be able to go? *ikanu koto arunai*, the not going will probably not be, i.e., he will surely go; *Yedo e itta koto arimasu ka*, has he ever gone to Yedo? lit., the having gone to Yedo—is it? *Nippon no sake nonda koto wa nai*, I have never drunk Japanese sake; *noboru koto wa noboraremasu*, *oriru koto wa mudasukashi*, so far as getting up is concerned, I can get up, it is the coming down that is difficult.

§52. *Must*.—The English auxiliary verb 'must' is expressed by a periphrasis. 'I must go' is *ikaneba*

(大英博物館蔵)

アストン

日本口語文典 初版

第26ページ

cannot say *Watakushi o kayeri nasarinasya* for 'I will go away.' It is chiefly used in the second person, and is very common in the Imperative Mood. Ex. *O kayeri nasare*, please go away; *o ide nasore*, come! *sukoshi o machi nasare*, wait a little; *mō o kayeri nasarinasa ka*, are you going away already? *o haiti nasarinase*, be so good as to walk in.

Nasaru is also used in the third person in speaking of persons of rank or to whom respect is due. Ex. *Dannauchi ni o ide nasaru ka*, is the master at home? *kōshi ga o kime nasarinashata tōri*, in the manner decided by the ministers.

As shown in several of the above examples, *nasaru* may be combined with the honorific auxiliary *nasu* in the same way as any other verb.

Nasuru is much used as a more polite word than *suru* with nouns of Chinese origin, which in this case generally prefix the honorific particle *go*. Ex. *Go men nasore*, do honorable permission, i.e., I beg your pardon: *go ran nasore*, look! *go keiko nasarinasa ka*, are you studying? *itsū go shuppan nasarinasa ka*, when do you sail?

§51. *Koto*, action, thing, may be called an auxiliary noun. It is much used with the present participle, the negative form in *nu*, and the past tense in a way which will be best understood from a few examples. *Iku koto*, the going; *ikanu koto*, the not going; *itta koto*, the having gone; *iku koto wa dekinashō ka*, will the going be possible? i.e., shall we be able to go? *ikanu koto arunai*, the not going will probably not be, i.e., he will surely go; *Yedo e itta koto arimasu ka*, has he ever gone to Yedo? lit., the having gone to Yedo—is it? *Nippon no sake nonda koto wa nai*, I have never drunk Japanese sake; *noboru koto wa noboraremasu*, *oriru koto wa mudasukashi*, so far as getting up is concerned, I can get up, it is the coming down that is difficult.

§52. *Must*.—The English auxiliary verb 'must' is expressed by a periphrasis. 'I must go' is *ikaneba*

(広田教授蔵)

Mil. 8° 739⁽³⁸⁾

GRAMMAIRE

ABRÉGÉE DE LA LANGUE PARLÉE

JAPONAISE

PAR

W. G. ASTON, M.A.

INTERPRÈTE-TRADUCTEUR DE LA LÉGATION BRITANNIQUE AU JAPON

TRADUITE PAR

ÉMILE KRAETZER

CHANCELIER DU CONSULAT DE FRANCE A YOKOHAMA

sur la deuxième Édition Anglaise revue et corrigée spécialement par
l'Auteur pour l'Édition Française

SUIVIE D'UN

VOCABULAIRE

*Des mots contenus dans cette Grammaire et de ceux pouvant
être utiles à un commençant.*

YOKOHAMA
IMPRIMERIE DE C. LÉVY
1873

